

「光あれ」 創世記 1 章 1－5 節

聖書は、「初めに、神は」という言葉で始まっています。この「初めに」は、あくまでも人間の側から観察した「初めに」であり、私たちの祝福のための「初めに」です。これは神さまの人間に対する愛の御業の始まりであり、そのご計画とご意思を具体的な行動に移される特別な時を意味しているのです。

神さまが光を創られる前、「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。」とあります。ここで言われている「混沌」というのは、人や生物の住めるようなところではない荒れ果てた土地、すべてが破壊し尽くされ、無秩序となってしまう状態のことです。つまり、その地は人間にとって命のある場所ではなかった、ということです。「産めよ、増えよ、地を満たせ。地を従えよ」との神さまからの命の祝福を受けるために必要な一切が何もないところであったということです。

神の祝福を受けるための一切がない。要するに絶望的で危機的な状況が、そこに厳然と果てしなく広がっていたということです。しかも、「闇が深淵の面にあり」とあるように、まったくの闇でおおわれていた。徹底的に絶望的であったのです。

ところが、その闇の中で「神の霊が水の面を動いていた」と聖書は言います。「動いていた」を口語訳では「おおっていた」と訳されています。神の聖なる霊が、この混沌と暗闇の世界を覆い、包んでいた。神さまを信じないで、神に背き、自分勝手に生きようとするこの罪の世を、神の霊は天地創造の初めから今日まで、覆い包み、完成へと導こうとしておられたということです。

そして時満ちたとき、「神は言われた。『光あれ。』」と。この祝福は、神さまの言葉によってなつたと言います。言葉とは、神さまの御心です。神さまの意志です。つまり出来事は、神さまが愛をもって考え、計画され、私たち人間に対する特別な思いによってなされていくということです。それは神の一方的な恵みの業なのです。

しかも、その神の愛と熱意は、私たち人間が罪のもとに置かれることになっても変わりありません。闇に支配された混沌は、人間の罪とそのもたらす悲惨、神さまの怒りと審きの現実です。しかし神さまは、そこに光を生じさせ、それを良しとしてくださったのです。それは、私たちの罪によってもたらされたこの悲惨な現実、神さまの怒りと審きによって滅びるしかないような現実を、神さまが変えてくださるということです。私たちの罪を赦して、新しく生かしてくださるという恵みの現れです。神さまの良しとされる御心は、私たちが赦されて新しく生きることをこそ、神さまは望んでおられるのです。

そして、その出来事こそイエス・キリストです。救い主の到来を預言したイザヤは、こう預言しました。「闇の中を歩む民は、大いなる光を見／死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。あなたは深い喜びと／大きな楽しみをお与えになり／人々は御前に喜び祝った。」（イザヤ 9：1－2）

私たちには光があります。絶望が絶望のままに終わらない確かな光があります。この光を、私たちはクリスマスの時にいただき、その光を心に灯す者とされました。どうか、この一年、その光の中を歩む、そのような歩みをしてまいりたいと願います。